

町史

とっておきの話

207

洋画家

渡部 等

只見瞽女夜話

樋戸の爺さまに助けられて

瞽女は門付け唄の見返りに小皿一杯分のお米か、わずかばかりの銭をもらって移動していました。やがて何十軒も歩くと、もらったお米がたまつて重くなるので、すぐに換金してまた移動します。その売られたお米は瞽女の百人米といい、珍重されました。目の見えない彼女らが膨大な量の瞽女唄を覚えるというので瞽女の持つていたお米を家の子どもに食べさせると、頭がよくなると考えられたようです。

さて、前回の話の続きをしましょう。

田倉（田子倉）で気持ちよく唄った翌朝、親方たちと合流したハルは、ある山中まで来たとき「ちよつと用を足して来るから少しここで待っている」と言われました。しかし、いつまで待っても親方や姉瞽女たちは戻ってきません。そのうち荷物もなにもないことに気がついたのですが、それでもやが

ては戻ってくるだろうと待ち続けました。結局、一晩中鳥獣の声におびえ、途方にくれながらそのまゝ道にたたずんでいました。朝になつて人が山に入つて来る気配がして、しばらくすると山道を二人の足音が聞こえてきました。ハルを見つけた二人は道に狐が娘に化けて立っているのかと驚きの声を上げました。六十歳くらいの年輩の男と若い男でした。わけを話したあと、男たちが背負つた小枝の束の上に乗せられるような格好でハルは師匠たちが昨夜泊つた村に向かつて山を降りて行きました。

「このときほど人の情の温かさや深さに感動したこと、助けられたという嬉しさを味わつたことはない。何度思い出しても涙が出るほどだ」とハルさんは言います。

この山道を降りて行つた村が樋戸だつたのです。

「なんでこんな小さな子を山の中に置き去りにしたんだ。かわいそうなことをして」と樋戸に戻つて親方のところに来た年配の男が声を荒らげて問い詰めたので、初めて自分がお仕置きをされていること

に気づいたのでした。前の晩に田倉の宿で「葛の葉の子別れ」の後日譚を自分なりに唄つたことが親方の耳に入つていて、そのことに対して烈火のごとく腹を立てていたと言ふのです。

「師匠たる私以外から教えられたものを演じられては親方の面目が立たない。お前が勝手に自分の唄を唄つたんだから勝手に歩くがいい。家に帰つて縁切り金を持つて来い」と言い、何度許しを請うてもなかなか許してくれませんでした。やがて、もう二度と親方から習つたもの以外は唄わないという約束をしようやく許されたのでした。

「まだ旅の仕事をするようになつて二年くらいしか経っていない

十か十一歳の小娘だもの、ものの道理がわかるはずもないのに何の理由も告げずに山の中に置き去りにするのはあまりに酷すぎるお仕置きだ。しかし、私がいい気になつて唄つたからいけなかつたのだらう。それにしても雨が降らなかつたからよかつ

たものの、あの夜の心細さはなかつたね。年配の男衆の背中に乗せられたときの嬉しさは今も忘れられないね」

（最後の瞽女 小林ハルく光を求めた一〇五歳〜）

ちなみにこの年配の男衆ですが、当時樋戸一番の旦那だつたといふのですが、今となつては一つ二つの心当たりはあるものの、どの家の確証がないのは残念です。その後、話の顛末を聞いたハルさんの実家から感謝の気持ちとして布団用反物や名物の柿などが樋戸の男衆の家に送られ、樋戸からはお返しとして会津名産の勝ち栗などが送られたりして、しばらく交流があつたようです。



門付けをする瞽女（渡部等・絵）